

## ●中国、階級社会の実態

ユン・チアン著／土屋京子訳

『ワイルド・スワン』（上・下）



宮脇淳子（国際関係基礎研究所 主任研究員）

一九四九年に中華人民共和国が成立した後、中国現代史は、中国共産党の公式発表以外の資料がほとんどない、研究するには厄介な分野である。また現代史の宿命として、一つの事件を詳細に解説した論説はあっても、総合的評価は後世の判断にゆだねるといった態度を取りがちだ。さらにありていに言えば、共産党一党独裁の社会主義国家に関しては、真実を追求するという意味での本当の研究は、その国の内部ではもちろん、日本のような外国においてすら、保身のためにほとんど為されてこなかったというのが実状である。

ソ連邦が崩壊した後、我々はこれまで知らされていなかった多くの事実を知ったが、それらはもう過去のこととして、日本の大部分の人は深刻には考えない。我々日本人は、過去は水に流してみんな一緒に出直すのが好きなのである。世界中見て最後に残った純然たる社会主義国家、中国と北朝鮮についても、開放政策を取り、「社会主義市場経済」を進めると言っている限り、まともな相手と見なし

中国は社会主義国家である。それが中国人にとってどのようなことを意味するのか、中国を訪ねたことのある感受性の鋭い人でも、外国人には漠然としかわからない。本書の著者張戎（チアン・ユン）は、党の高級幹部の両親が文化大革命で迫害され、自身も十六歳の時農村に下放された。その後「はだしの医者」、機械工場の労働者となり、一九七三年鄧小平が復権して大学が学生の募集を始めた時、やっとの思いで四川大学外文系に入学した。その頃のこととしてこう言う。

△あるとき、中国に住む旧友をたずねた西欧人の手記を読んだ。手記によれば、大学の教授をしている中国人の旧友は、批闘大会で批判されるのは良いことだ、僻地に下放されるのも良い経験だ、思想改造の機会が与えられるのはまことにありがたい限りだ、と明るい笑顔で語ったという。中国の人々は西欧人が苦痛と思うような体験をよるこんで受けている。毛沢東はまさに中国の人民を「新しい人間」に作りかえたのである——手記はそう結んでいた。私は、あきれてものが言え

なかった。不平不満がひとことも出ないときこそ抑圧がいちばんひどいのだということだが、どうしてこの外国人にはわからないのだろうか？……大学の教授ともある者がこれほどなさない状態になり下がってしまったのを、おかしいと思わなかったのだろうか？こんなに打ちのめされるまでにどれほどの恐怖の日々があったか、気づかなかったのだろうか？ そのころの私は、体制の目をおそれて芝居をするという身の処し方がそもそも西欧人の概念にはないこと、したがって中国人の本音が西欧人にはなかなか読みとれないのだということ、知らなかった。▽

△中国のような体制をまるつきり経験したことのない西欧の人々は毛沢東政権の宣伝文句やレトリックを顔面どおりに受けとってしまふということも、私は知らなかった。だから、毛沢東や文革を賞賛する文章を書く人たちは嘘をついているのだと思っていた。ああいうことを書く連中は、きっと中国政府の「熱烈歓迎」に買収されたにちがいない、と友だちどうしで冗談を言いあっていた。（中略）「天府之國」とうたわれた四川省でさえ一般人民の肉の配給がひと月わずか二百グラムだった時期、中国をおとずれたヘンリー・キッシンジャーが連日連夜フルコースのもとでなしを受けて腹が出てきたと言ったと、新聞各紙が誇らしげに報道した。外国人だけが王侯貴族のような待遇を受けるのを見て、中国の民衆は猛烈な反感を抱いていた。私たちの

仲間うちでは、こんな会話をえ出た。「国民党が『中国人と犬は立入禁止』って書いた立て札を出したって批判するけど、いまだって同じようなことしてるじゃないの、ねえ。」▽

＋＋

このような率直な意見を至るところで開陳する著者張戎は、一九七八年に、一九四九年以来初めての四川省から西側への留学生としてロンドンに渡った。現在はロンドン大学で教鞭を取り、夫はイギリス人である。彼女は中国人であることをやめたから、このような本が書けた。それでも、本書は事実上一九七六年の毛沢東の死までしか叙述しない。それはなぜかという、鄧小平政権の時代については発言を控えるのが、家族の安全を考えたら賢明なやり方というものだからである。

一九六六年に始まり、中国全土で多くの人民が迫害された文化大革命は、一九八一年に共産党中央委員会によって、その目的と結果が全面的に否定された。今では、文革の時にはひどい目にあっただけという中国人も多い。言っても安全だからだ。しかし、その最中に何が起ったのか、我々は少しでも知っていたらどうか。このことから類推して、現在の中国で起っていることの本当の意味を我々が知るためには、今その中にいる中国人のきわめて優秀な人が、将来中国の外に出て安全な立場に身を置いてから、説明してくれるのを待たねばならないだろう。

人民の平等を唱った社会主義国家が、実は

である。

＋＋

本書の原著は英語で、一九九一年秋に出版された。日本語訳は今年一月の刊行以来、六月現在もなお書店の売上のベスト・テンに入っている。書評も多く出たので、内容紹介は必要ないだろう。満州生まれの祖母と母と著者自身の三世代の中国女性の物語である。物語は大変面白い。三人の女性の個性が強く出ており、歴史事件との関わりも描写力がある。家族の愛情や夫への不満など、世界共通と思えるほほえましい場面もよく書けている。しかし、訳者ですら「私たちに理解できる部分も理解できない部分もひっくりかえり、ありのまま描かれている」と言うのは、いかに中国が我々の想像を絶した世界かということを証明している。

それにしても、中国社会を赤裸々に描いた文学として成功したのは、『大地』の著者パール・バック以来、『上海の長い夜』の鄭念、『大地の子』の山崎豊子、本書の著者張戎と、みな女性であるのはなぜだろう。彼女たちに共通しているのは、中国と中国以外の文明両方に通じて中国を外から見ることでできたこと、政治や主義にとらわれず自分の経験を優先して考えることができたことである。男よりも女の方が、生まれた国や育てられた文化を捨てるのにためらいがない個人主義者であるのではないかと、評者には思える。

（講談社・上下巻共一、八〇〇円）